



葛川文化祭でのポスター発表と交流活動

2025年11月1日・2日に実施された葛川文化祭にて、これまでの地域住民との対話や現地での地域との交流活動を中心にポスターにまとめ、発表を行いました。葛川文化祭の会場では、来場者に向けて学生が活動内容を丁寧に説明し、意見交換を行いました。学生たちの主体的な学びと地域との協働についてまとめた発表は、特に地域の方々から高い関心を集め、学生にとっても貴重なフィードバックの機会となりました。

参加学生からのコメント

田植え体験や葛川にお住まいの方へのインタビュー内容を、葛川文化祭の場でポスターとして発表したところ、多くの来場者が京都産業大学の学生がどのような活動をしているのかに興味を示し、足を止めて話を聞いてくださったことがとても印象的でした。

小川万里

葛川の活動で特に印象に残っていることは、住民のAさん宅への訪問です。Aさんは葛川で育ち、今も尚、葛川を愛してやまない一人です。そんなAさんからは、「葛川のかつて」についてお伺いしました。Aさんはとても物腰の柔らかい方で、大学生が突然訪問したとしても心優しく出迎えてくださりました。幼い頃の暮らし、葛川で起こった大地震、それから葛川に伝わるガワタロウについてなどたくさんのお話を聞かせていただきました。様々な話を聞かせてもらう中で生まれは違えど、本当に葛川を愛してやまない方なんだと感じました。

他の話を伺った地域の方もそれぞれが素敵だったので、葛川が素晴らしい地域であり、Aさんや移住者の方が葛川というこの地域に希望を見出している理由も自分なりにではありますが、わかった気がしました。

辻本温人

私が葛川での活動を通じて最も心に残っているのは、滋賀県庁で行われた連携協定式です。これまでの活動の集大成として、一つの大きな形を残せたことに強い達成感を感じました。これまでの葛川での活動、特に田植えなどの農作業では、地域住民の方々の郷土に対する並々ならぬ熱量に何度も圧倒されてきました。その真摯な姿を間近で見てきたからこそ、今回の協定式で三日月大造知事に直接活動を報告できたことは、私にとって非常に意味のあることだと感じました。自分たちの活動が単なる体験に留まらず、県のプロジェクトとして公式に認められたことは、葛川の魅力を広くアピールする絶好の機会になったと感じています。住民の方々の想いを背負い、少しでも地域の助けになれたことが何より嬉しいです。この経験を糧に、今後も地域と社会を繋ぐ役割を大切にしていきたいです。

加藤要

稲刈り体験では、初めてくわを使って稲を刈ることができ、とても新鮮でした。自分たちが植えた稲を収穫することで愛着が湧き、地域の方にコツを教えていただきながら作業するのも楽しかったです。特に、すごく手際の良いおじいさんの作業には感心しました。皆で収穫したお米を食べたときの美味しさは格別で、田植えから収穫まで一連の経験ができたことに、とても充実感を感じました。

白間愛留

長い間葛川に住んでいるお年寄りの方へのインタビューで、昔の生活や働いていた時代の話だけでなく、現在の地域の変化についてもその方ならではの視点で聞くことができ、新鮮に感じました。特に、移住者に対する理解や考え方を直接知ることによって、地域の人々がどのように変化を受け入れてきたのかを考えるきっかけになりました。

濱本ひかる

私が特に印象に残っている活動は、葛川在住の方へのインタビューです。実際にお話を伺う中で、長年この地域で暮らしてこられたからこそ語れる経験や思いがあり、葛川の歴史や人のつながりの深さを強く感じました。昔の生活や、地域で助け合ってきたエピソードなどは、資料や事前学習だけでは知ることができないもので、直接対話することの大切さを実感しました。また、私たち学生の話にも丁寧に耳を傾けてくださり、世代を超えた交流の価値も感じました。

後藤寿々佳

葛川小中学校との交流活動で行ったオオサンショウウオの散歩では、自然だけでなく、子どもたちとの関わりが印象に残りました。一緒に川の中を探索しながら、子どもたちが生き物に強い興味を持ち、楽しそうに学んでいる姿がきらきらしていました。今回の活動は、自分も子供に戻ったような気持ちになって取り組めたので、貴重な体験になりました。

山田楓太

つながる葛川、 広がる共創の輪

インタビューとフィールドワークから見た、葛川の歴史と暮らし



特定非営利法人葛川共創ネットワーク

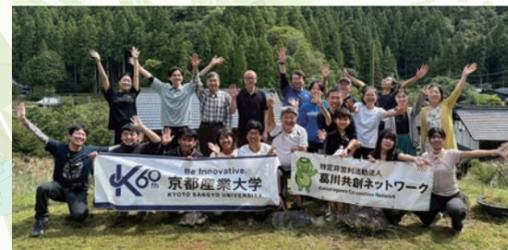
京都産業大学 経営学部 森口ゼミ

参加学生：

小川万里・辻本温人・加藤要・白間愛留・濱本ひかる・後藤寿々佳
高橋歩夢・飯室清春・山田楓太・井上晴翔・更屋大時

協力：葛川地域のみなさん

デザイン：株式会社いこまや 井上成美 印刷協力：大興印刷株式会社 成尾恒一郎



地域と大学が一緒に進めている取り組みです。
令和7年度「しがのふるさと支え合いプロジェクト」の一環として実施しました。

葛川の歴史と文化

断層によって形成された「鯖街道」と安曇川流域の「シコブチ信仰」

滋賀県大津市の北西端、高島市との境に位置する「葛川（かつらがわ）」地域は、比良山系の懐に抱かれ、安曇川の上流に位置する山間の地です。かつて若狭と京都を結んだ「鯖街道」（若狭街道）の中継地として栄えました。

また、約 1200 年以前から安曇川流域では林業が栄え、安曇川の流れを活用した「筏流し」（木材を筏に組んで運搬する）にて、琵琶湖を經由して、京都、奈良の神社仏閣の建立に寄与しました。この筏流しの安全を祈る「シコブチ神」の信仰が安曇川流域には存在します。

ここでは、令和 7 年度に京都産業大学森口ゼミの学生が、葛川地域の住人の方へ実施したインタビューとフィールドワークの内容を紹介します。初めて葛川を訪れる方や葛川に関心を持つ方向けに、その多面的な魅力を紹介します。



地形が生んだ奇跡の道「鯖街道」

葛川を語る上で欠かせないのが、福井県小浜市と京都を結ぶ「鯖街道」です。この道は単なる鯖の輸送路ではなく、人々と文化の往来の歴史が織り重なる、地球の力によって誕生した特別な物流のルートでした。



資料提供：高島市教育委員会

修験の聖地 葛川明王院と太鼓回し

葛川を中心地である坊村には、平安時代から続く天台宗の古刹「葛川明王院」があります。ここは比叡山延暦寺の僧侶たちが修行を行う「葛川参籠（かつらがわさんろう）」の地として知られています。

断層が作った、人々と文化の往来の歴史の街道

鯖街道がこれほど重要な物流ルートとなった理由は、多少の峠があるものの、ある程度平坦な街道であったことにあります。これは、東西に走る「熊川断層」と、南北に走る「花折断層」という 2 つの断層が直角に交わってできた谷間の街道です。この地形のおかげで、重い荷物を背負った人馬などが、山の「鯖の道」よりも往来しやすかったと思われます。今から約 600 年前、応永 15 年（1408 年）に、初めて日本に上陸した象（朝廷へ献上）も鯖街道で都まで歩いたと言われています。

葛川周辺（朽木興聖寺界限）は、有事の際、京都からの緊急脱出先であり、「鯖街道は脱出ルート」でもありました。

開山の歴史

平安時代初期、天台宗の高僧である相応和尚（そうおうかしょう）が葛川の「三の滝」で修行中、生身の不動明王を感得したことが始まりとされています。

伝統行事「太鼓回し」

毎年 7 月 18 日、修行のクライマックスとして行われるのが「太鼓回し」です。



室町將軍である足利義晴・義輝公は戦乱を避けるために葛川周辺に滞在しました。

また、1570 年、浅井長政の裏切りに遭った織田信長が京都へ逃げ帰るルートも鯖街道でありました。葛川、朽木地域の隠れ里の趣は、このような歴史的な位置付けからも醸成されたのかもかもしれません。



「これを見ないと葛川の夏は始まりません。最近では地元の若者が少なくなったので、中学生や学生さんにも教えて伝統を繋いでいます」

葛川を支えた産業

ー木炭といかだ流しー

かつての葛川は、広大な森林資源を活用した林業の村でした。住民の多くは林業に従事し、冬の間は炭焼きや木材の搬出が主な収入源でした。



資料提供：高島市教育委員会

「炭焼き」の隆盛と木炭自動車

かつて葛川には 300 以上の炭焼き窯があり、生産された炭は京都などへ出荷されていました。

花形の職業「筏乗り」

安曇川を利用して木材を運ぶ「筏流し」は、葛川の象徴的な風景でした。

・鉄砲堰（てっぽうぜき）：谷の水を堰き止め、一気に放流して木材を流すダイナミックな手法。

・筏乗りのステータス：いかだ乗りは現在のパイロットに匹敵するほどの花形職業で、賃金も一般の 3 倍ほどあったと言われています。

「昔は木炭の生産が主で、冬の間は農業ができないので、ほとんどの方が木炭生産か植林に関わっていました。木炭車（木炭を燃料とする自動車）のための『コッピン』と呼ばれる燃料も製造していて、私の親父も工場を作って人を雇い、京都の方へ出荷していました」

「筏乗りは危険な仕事でしたが、非常に誇り高いものでした。岩に当たりそうになると、柔軟性のある『コブシの木』で作った竿で筏を操るんです。技術の要る仕事でした。」

水の神「シコブチさん」とガワタロウ伝説

急流での木材運搬は常に死と隣り合わせでした。そのため、安曇川流域には独自の山岳信仰の「シコブチ神」が根付いています。

シコブチ神社

安曇川流域には、いかだ乗りの祖神として崇敬される「シコブチ神」を祀る神社が危険な淵に点在しています。16 ものシコブチ神社があるとされ、これは日本でも非常に珍しい特徴です。

ガワタロウ（カッパ）への供え物

川の危険な場所にはカッパ（この地ではガワタロウと呼ばれる）がいると信じられており、水難事故を防ぐための風習が今も語り継がれています。



「初なりのキュウリは、まず川に流してガワタロウに捧げるんです。子どもたちが水の事故に遭わないように願いを込めて。今でも欠かさず続いています」

葛川の暮らし 過去から未来へ

葛川は人口 238 名（2025 年時点）で、2022 年までは人口が減少傾向にありましたが、2024 年から微増し、現在では「限界集落」からも脱した中山間地域で、その豊かな自然や文化に惹かれた移住者が増えています。

「今は道路が整備されて便利になったけれど、村を出ていくのも早くなった。でも、ここは空気がいい。水もいい。一度外に出た人も、やっぱりここはええとこやなと言ってます」

住民が語る「昔と今」

かつては「ガチャコン、ガチャコン」と帯を織る機音が響き、夏の夜には 9 つある集落ではそれぞれに盆踊りが賑やかに行われていました。

新しい風とこれからの葛川

近年では、移住者が古民家を改修して住み始め、自治会加入率は 97% 超え、それぞれの愛し方で葛川地域を愛し、自律的な信頼関係を構築し、住民のほぼ半数が移住者となっており、移住者を中心に緩やかな紐帯が生まれ、地域住民との関わりを自発的に深めています。

「移住してくる人はみんな良い人ばかり。人が少なくなったからこそ、お互いの立場を理解して協力し合っていくことが、この地域を維持していくために一番大切やと思っています」

葛川地域データ（2025 年時点）

- 人口：238 名へと増加。住民のほぼ半数が移住者となり、2024 年には限界集落から脱した都市近郊型の中山間地域
- 学校：葛川小中学校（大津市唯一の小中一貫校・小規模特認校）
- 主要アクセス：最寄駅は、堅田駅（車で片道 30 分）月から土まではデマンドタクシーが堅田駅から葛川地域まで運行（片道 30 分 800 円）湖西道路「真野」IC より約 30 分
- 特徴：都会から車で 1 時間以内の都市近郊型過疎地、冬は積雪が多いが美しい景観、夏は冷房なしで過ごせるほど涼しい

葛川は、断層が作った険しくも美しい地形の中に、人々の知恵と祈りが凝縮された場所です。鯖街道の往来文化とその歴史、安曇川の淵に宿る神々、そして代々この地を守り続ける人々の温かさに触れることができるでしょう。